

# 西洋音楽の指揮に関する提言

多田武彦

## はじめに

8 年程前から「合唱音楽に関する効率的練習方法」を編み出し、比較的向上心の強い十数の合唱団において試みたところ、短期間に演奏技術が向上し、より高度な名演奏に向かって努力される合唱団が増えてきた。その主な内容を、2009 年 8 月にまとめ、爾後、多くの方々からの質問などへの回答を付け加え、2009 年 12 月、2010 年 8 月、2011 年 3 月と増補改訂版を書いたが、その後、「これらのテキストの中の諸先生の薫陶や、世界の超一流交響楽団と名指揮者の特技について、詳述してほしい」との要望が、主に指揮者の方々から寄せられた。そこで、掲題の提言として記した次第。

## I 作曲家・故 清水脩先生の薫陶

### 三位一体論

2011年3月23日付「合唱音楽に関する効率的練習方法・改訂第三版」（以下「効率的練習・改訂三版」という）p.4の3（構築性と装飾性）、p.9の5（演劇と音楽の時間的進行上の共通点）をご参照願いたい。

### 1. 建築にたとえて

私は、清水先生から次のような薫陶を受けた。

平面図だけ描いて「私は一級建築士だ」と言っても、誰も信用しないのと同様、リズムとメロディーだけを使って作曲し「私は作曲家だ」と言っても通用しない。一級建築士は、地質調査・構造計算・建築部材・建築基準法に即した諸事項を斟酌して設計図を作成し、建築確認書を役所に提出して建築許可を得なければならないのと同様に、作曲家も楽典などのほか最低限、和声学・対位法・楽式論を斟酌して作曲しなければならない。

そして、以下の手順を指示された。

まず、君の好みの交響曲の総譜を求め、楽器別に【構築性主要 4 項目】（リズム、メロディー、ハーモニー、楽式論）と【装飾性主要 4 項目】（デュナーミク、アゴーギク、コロリト、フレージング）を徹底分析せよ。名作曲家の奥義や秘法が徐々に解ってくる筈だ。

（詳細は「効率的練習・改訂三版」参照）

次に、この分析が終わったら、【構築性】と【装飾性】の分析結果を念頭において、再度、総譜を見ながら名演奏の音源を聴き、名演奏家達が【構築性】と【装飾性】をどのように駆使しているか検証せよ。

ひとつの名作でいいから、その【構築性】と【装飾性】を楽譜で何度も繰り返し分析し、更に、その名作の名演奏音源を百回聴くことが肝要だ。五十回目くらいになると少しずつ、色々なことが解ってくる。

堅牢な【構築性】の上に味わい深い内装・外装が加わって名建築物が生れるように、一定の水準までの西洋音楽の基本やアンサンブルの妙を体得した上で「ハート」を付加していくべきで、その途中の工程を疎かにしてしまうと、震度 5 以上の地震に耐えられない建築物が出来てしまう。

## 2. 大工の棟梁と指揮者

清水先生は、大工の棟梁や建築の現場監督と、音楽の指揮者の類似点や責務について私を教導された。関西の名刹の次男であった清水先生は、寺社建築に造詣が深く、折に触れ奈良や京都の神社仏閣を案内しながら私に語られた。

厳冬の奈良西ノ京、勝間田池から薬師寺そして唐招提寺へお供した時のことを書き留める。

タクシーを降りた場所は薬師寺ではなく、西南西へ六百メートルの勝間田池西畔。

開口一番清水先生は「ここは名写真家・入江泰吉先生はじめ多くのカメラマンが、近景に勝間田池、中景に薬師寺、遠景に若草山を配した遠望の景観を、春夏秋冬に亘って撮り続けた場所だ。勝間田池は謂わば交響曲の序章部分。ここから薬師寺に向って池の畔を逍遙すると、小波や鳩や冬枯れの葦が、序章部分の主題を、さり気なく支えていることに気が付く。薬師寺に近付くと、強力な第一主題のように金堂、東塔が眼前に迫る。」と仰った。

当時、西塔は消失・再建前だった。1976 年、宮大工・西岡家三代目常一は、残り少ない資料や、解体時に見た先人の妙技に思いを馳せ記録したものを参考に、薬師寺の改修工事に取り掛かった。

「通常、一流の大工の棟梁や現場監督は、建築に関する基本的知識と技術を修得、設計図を通して施主や一級建築士の意図するところを洞察し、建築物を具現化するものだが、指揮者も前述の作曲家と同様、楽器別に【構築性】と【装飾性】について徹底分析せよ。」と繰り返された。

## 3. 名人語録

これまで述べた過程を経た後、指揮者はこれをメンバーに伝える訳であるが、世界的にも、「超一流の指揮者・音楽教育機関の指導者・音楽評論家」は、前記の基本的知識と技術の徹底分析や修得、異文化の秀作の分析・応用などの結果を踏まえて、作品の骨太の潮流の変容を伝承し教導するが、一方で、一般によく見聞する「指揮棒の振り方」や、あいまいな「文学的解説による作品の説明」、更に、メンバーに対して「お前たちの音楽にはハートがない。もっと心を込めろ！」などの怒号、「枝葉末節に捉われ過ぎた指示」などを聞く機会は少ない。

メンバーは一流熟練職人と同様、それぞれの技術を駆使すると同時に、演奏全体に齟齬を来さぬよう、独り善がりな演奏をしてはならない。

「効率的練習・改訂三版」の p.7 の (5. 名監督、名俳優の語録) と重複するが、参考のために尾上菊五郎丈と小津安二郎氏の語録を再掲し、新たに宮大工・西岡家について記載する。

### 1) 歌舞伎における希代の名俳優・六代目尾上菊五郎丈の語録

一部の師匠たちは、弟子に向かって「お前の演技にはハートがない！」とか、「心を込めて演技しろ！」とか言うが、必要最低限の技術を体得しない段階では、「心で演技」など到底出来るものではない。そのような師匠の弟子は、その場での思い付きの演技をせざるを得ず、偶然、上手く出来たととしても、長続きはしない。それほど、「演技の修行は大変だ。しかも永い年月を要する」。

多くの技術を、一つ一つ丹念に確実に身に付けて、その範囲内できちんと演技をすれば、それ相応の芸を表現出来るものだ。「心で演技」するのは、真の名人のやることで、自分などは、まだまだ修行中の青二才だよ。

## 2) 名映画監督・小津安二郎氏の語録

人が映画を見る時、通常は、画面の10分の1しか見ることが出来ない。だから、名画は10回見ることだ。1回目は、楽しくサリと見る。2回目からは1回ごとに「脇役やエキストラの演技」「構図」「カメラアングル」「色彩の配合と濃淡」「照明」「背景」「音楽と音響効果」「衣装・時代考証・大道具・小道具」を、それぞれ集中的に見聞していくと、最初にサリと見た時には全く気付かなかった「名監督の秘法」や「スタッフの苦勞」が解ってくる。これらを総合して、10回目にもう一度サリと見ると、初回とは全く異なった「名作の重み」が理解出来るようになる。

## 3) 宮大工・西岡家に伝わる家訓の内、棟梁の統率力や技術研鑽に関すること

- ① 百工あれば百念あり。一つに統ぶるが匠長の裁量なり。  
多くの勝れた職工が居れば、それぞれに仕事への理念がある筈。これを統率するのが匠長の裁量。
- ② 百念一つにとどまるを、正とや云うなり。  
これらの諸々の見解を無視して匠長は独断に走るな。
- ③ 一つにとどめる器量なきは、謹み懼れ、匠長の座を去れ。  
これらを熟考し一つにまとめ上げることが大切。匠長にこの統率力のない時は、その座を去れ。
- ④ 諸々の技法は、一日にして成らず。

## II 指揮者・故 林雄一郎先生の薫陶

### アンサンブルの重要性

千年以上の歴史をもつ西洋音楽が、我国の学校教育の一環として導入されたのは明治時代初期だ。しかし「主にリズムとメロディー中心に演奏される邦楽・民謡・わらべ歌など」に馴れ親しんだ日本人は「和声学・楽式論などの構築的基礎理論」や「楽典に記載の諸規則」、更には「デュナミック・アゴーギクなどの装飾的技法」までには、手が届かなかった。

爾後、有能な作曲家や演奏家の尽力もあり「歌曲・唱歌・流行歌・軍歌・校歌・社歌」などの分野にも西洋音楽の手法を使った名作が生れ、国内にも滲透した。

ただ一つ取り残されたのが「アンサンブル」。日本古来の動態芸術の中には、見事なアンサンブルを示すものも多いが、「西洋音楽の多くの技法を駆使したアンサンブルの分野」では、欧米諸国と比肩出来るまでに達していなかった。

そこで、林雄一郎先生（※1）は、ドイツ合唱曲やドイツ・オーストリアの交響曲の名作の楽譜とSPレコードを輸入し徹底分析され、「西洋音楽の多くの技法を駆使したアンサンブル」の修得方法や指導要領を考案された。

---

ここで、私が嘗て、林先生から厳しいお叱りを戴いたエピソードを一つ。

1951年の関西合唱コンクールで、私の指揮する京都大学男声合唱団は関西学院グリークラブに次いで2位に入賞したが、林先生の評点は6位と厳しかった。その理由を聞きに行くには余りにも畏れ多いので、そのままにしていた。

翌年には宗教曲に挑戦したものの3位に落ち、林先生の評点も8位と下がっていた。その日、会場のロビーで林先生にばったりお会いした時、先生の方からお声掛け戴いた。

「真の合唱音楽の構築を知らない一部の審査員は、君の演出過剰の演奏に気を取られていた。そんな審査結果を過信するな。昨年も今年も、あのようなアンサンブルの低劣な歌唱法での合唱音楽には、高得点を与えることは出来ない」と厳しい口調で仰ってから「君も来春には卒業するのだから、次のことを後輩たちに伝えておけ」と、次のことをご教示戴いた。

- ① メンバーに、軟口蓋共鳴を教え込み、更にその共鳴箇所を一定させる。
  - ② 次に全員が、先ずパート内の他の人の声に聞き耳を立てて、自分の声を他の人の声に同調させる。同調させずに勝手に歌うとパート内に微妙な不協和音が充満し音量も半減する。聞き耳を立てて同調させるとパート内の声量は倍加し、超一流交響楽団のチェロのパートソロのような骨太の響きが生れる。
  - ③ これを徹底させると、他のパートの声も聞こえてくるようになり、あの厄介な和声学を学ばなくても、多くの和音を識別出来るようになる。
  - ④ 更に、有能な指揮者の指示するデューナーミクや、重要なフレーズの開始時の硬軟、同じく終了時の残響型か持続型の整合性をメンバーが修得すれば、アンサンブルは一層良くなり、感動的名演奏への素地造りが完成する。
- 

林先生ご自身も、学生時代から求め続けられた名作の総譜や名演奏の音源を何度も分析することにより「西洋音楽の実践的指導要領」を確立し、爾後永年に亘り関西学院グリークラブを育成してこられた。

清水脩先生や林雄一郎先生のご薫陶のお陰で、私自身も名作や名演の音源を検討すると同時に、関西学院グリークラブや新月会の演奏会に通いながら、両団体の名演の徹底分析を続け、私自身の「西洋音楽の手法に基づく作曲・指揮・指導」にも大いに役立った。

(林先生の薫陶の中に出てきた手法は、後年、ウィーン・フィル、ベルリン・フィルなどから間接的に聴取した後述の演奏上の基本的特質に酷似している。)

---

※1 **林雄一郎** (はやしゆういちろう 2004年8月19日逝去) 昭和9年関西学院高商部卒業。在学中、関西学院グリークラブ指揮者として合唱コンクールで優勝。卒業後、新月会指導、また多くの合唱団の指揮、指導にあたる。

1980年10月、芦屋大学交換教授として、ソビエト連邦の高等専門教育省より招聘を受け、モスクワ音楽院に留学。山田耕筰に師事。関西合唱連盟最高顧問、新月会会長。社団法人全日本合唱連盟名誉会員。

(関西学院グリークラブ公式ウェブサイトより)

### III 東京藝大名誉教授・故 畑中良輔先生の薫陶

#### 「世界超一流指揮者と交響楽団による名演奏」の徹底分析 100 回以上の試聴

畑中良輔先生（※2）との出会いは 1961 年、慶應義塾ワグネル・ソサィエティー男声合唱団よりの委嘱作品・男声合唱組曲「草野心平の詩から」を初演して頂いた時に始まる。

爾後、折に触れご教導を賜っているうちに先生が近代日本抒情詩歌や歌舞伎などにも造詣が深いことを知った。尤も、先生の最多忙の時期は、私にとっても銀行勤務に追われていた時期だったので、その期間はゆっくりとお話する時間がなかったが、ここ数十年は食事をしながら、ご高説を拝聴する機会も増えた。その中から、先生が八十歳を超えてなお、「世界超一流指揮者と交響楽団による名演奏を試聴しながら、そこから新しい秘法を学びとられる凄まじさ」を教えられた時の感動を、以下に記述する。

ご高承のとおり、畑中先生は約 20 年の間、音楽之友社の依頼で音楽雑誌「レコード芸術」にクラシック音楽の新譜の解説や演奏会の批評を掲載されてこられた。先生が 83 歳、私が 75 歳の某日、昼食をご一緒したあと話が弾んだ時に、先生は突然次のようなことを話し始められた。

数年前、久し振りに（解説や批評を書くのではなく）、例えば、カール・ベーム指揮、ウィーン・フィルの名盤を取り出して、その名演奏に陶醉しながらじっくり聴いていると、ふと自分の右手の五指や二の腕や三の腕が、曲想に合わせて無意識のうちに動いているのに気付いた。更に、自分がウィーン・フィルを指揮していて、傍らでカール・ベーム先生も椅子に座って、手塩にかけた愛弟子たちの名演を満足気に聴いておられるような錯覚に陥っていた。始めのうちは、これも一種の加齢現象かと思ったが、名演に攀<sup>のぼ</sup>られて聴き続けていると、この歳になるまで全く気付かなかった「名演への秘法秘術」が随所に鑲<sup>め</sup>められていることに気が付いた。

すぐに、西洋音楽の【構築性主要 4 項目】（リズム、メロディー、ハーモニー、楽式論）と【装飾性主要 4 項目】（デュナーミク、アゴーギク、コロリート、フレージング）の合計 8 項目について 1 項目ずつ繰り返し分析しながら試聴していくと、数多の「名演への秘法秘術」の上に、名指揮と名演奏が成り立っていることに感泣した。

爾後、この手法でクラシック音楽のみならず、歌舞伎・映画・浄瑠璃・邦楽・浪曲・日本民謡・軽音楽など古今東西の動態芸術の名盤を試聴しているが、瞬間に目の前を通過していく動態芸術の奥義を理解して、これを作曲・演奏・評論などに組み入れていくことの重要性を噛みしめて、お互いに死ぬまで努力していこうよ。

あ、それから、今日は、つい気分が良くて喋ってしまったが、これは僕にとっては大切なノウハウだから、自分が死ぬまでは、他言無用にしておいてくれ。

※2 畑中 良輔（はたなか りょうすけ、1922 年 2 月 12 日 - 2012 年 5 月 24 日）

日本のバリトン歌手・合唱指揮者・音楽評論家・作曲家、日本芸術院会員。

福岡県門司市（現・北九州市門司区）生まれ。東京音楽学校声楽科卒、同研究科修了。宮廷歌手ヘルマン・ヴーハーペーニヒ（Hermann Wucherpfennig）に師事。オペラではモーツァルト歌手として活躍、「魔笛」「フィガロの結婚」「ドン・ジョヴァンニ」などの日本初演で主役を歌った。またドイツ歌曲・日本歌曲でも業績が多い。ヒュッシュ、リアヴィエーゴとの共演経験もある。

音楽評論の分野では『レコード芸術』（音楽之友社）などで活躍。音楽教育にも力を注ぎ、『日本名歌低声用 50 曲集』（カワイ楽譜）「イタリア歌曲集」（全音楽譜出版社）などの歌曲集の編纂、監修に携わった。合唱の分野で

は福永陽一郎とともに東京コリアーズを設立したほか、慶應義塾ウグネル・ソサイエティー男声合唱団の専任指揮者を務めている。二期会創設者の一人。(Wikipediaより)

## IV ウィーン・フィル、ベルリン・フィルなどの演奏上の特質

政治・経済・教育等々の分野についてのテレビや新聞の報道・評論家の批評などを見ていると、古今東西を問わず「大統領・総理大臣・代表取締役社長・学校長等々」組織の最高責任者の成果の多寡に、重度の毀誉褒貶が投げ掛けられることが多いようだ。実際は組織の長とその腹心だけで、物事が遂行出来るものとは考えられず、組織全体の総合力により成否が決まる筈なのだが……。

前述の「アンサンブルを重要視する西洋音楽の演奏」についても、指揮者に関する事項が多く、楽団員に関する事項は少ない。例えば、「華麗な太刀捌きのような指揮ぶり」「曲想に応じた喜怒哀楽の表情」を見ていると、音楽鑑賞の初心者は指揮者の一挙手一投足によってオーケストラ全体が動いているかのような錯覚に陥るし、評論家の文学的美辞麗句によって名演奏が生れるかのような勘違いをする。

それでは、ウィーン・フィル、ベルリン・フィル、パリ管弦楽団、ロシア国立など、超一流の楽団の内部はどうなっているのだろうか。各楽団の有力メンバーから、意外な、しかし真実の答えが返ってきた。

1. ヨーロッパの各国でも、一般の楽団では指揮者は良い演奏をするために様々なことをメンバーに教える。ただし、管弦楽や合唱のような「アンサンブルを重要視する西洋音楽」は、スポーツにたとえると、サッカーやラグビーのような、団体競技であり、単式テニスやゴルフのような個人プレーをする独唱・独奏とは異なる。

幸いこれらの国々の人たちは、物心ついた頃から、周りから聞こえてくる讚美歌や民謡に聞き耳を立てるうちに「西洋音楽の基本的構築性」を知るようになる。

2. 更に、名演奏に向って進んでいく場合には、指揮者もメンバーも「曲の解釈や演奏上の表現」を強要するとアンサンブルは毀れるし、またメンバーが様々な「自分流のヴィブラート」や「不安定な共鳴ポイントに無頓着な発声」で歌唱をすると、アンサンブルはますます毀れていく。

音程をとる時、人間の声が最も不安定、二番目が弦楽器。ヴァイオリンで説明すると、例えば「四本弦のうちの最高音を受け持つE線のA音を、第一ヴァイオリンのメンバー全員が奏する時、E線の解放弦のE音から何センチ何ミリの位置で押さえるか」などといったことは誰もやらない。パート練習の際に、ベテランも新人も、奏でながらパート内の単旋律に、陶醉し感動しながら、5～6時間もパート練習を続ける。

3. 前述のIIの①～③（軟口蓋共鳴→共鳴箇所を揃える→聞き耳を立て声を他と同調させる）により、演奏する楽曲の基本的構築性とアンサンブルが整えば、次に、同じく④によって、指揮者の指示する「デューナーミクや、重要なフレーズの開始時の硬軟、同じく終了時の残響型か持続型の整合性」をパートリーダーを中心にメンバー各自が確かめながら、素地造りを完了する。

ここから指揮者の登場となる。ここで、指揮者が手取り足取りメンバーを指導する団体も多いが、最終的に演奏し歌唱するのは、指揮者ではなくメンバーだから、自主独立の精神と努力の気概をメンバーに持たさなければならぬ。

参考までに次のようなエピソードを紹介する。

ヨーロッパの某一流交響楽団のある時期の常任指揮者は、指揮ぶりも華麗で、世界的人気も抜群、人柄も良好、個人的話題も多かったためマスコミ筋の評判もよく演奏会の切符や CD の売り上げも上々だった。しかし、リハーサルでは、メンバーへの指示が細かすぎて、骨太の演奏には程遠く、大志を抱いて厳しい採用の関門を潜り抜けてきた新進気鋭の真面目な若手メンバー間には、常に落胆と不満が横溢し、折に触れ先輩のメンバーに対して「先輩メンバーがたは不満に思わないか」と質問を投げかけた。

先輩たちはみんな、そんなことは疾とっくの昔に心得ているよ、君たちも大人なのだから、これから言うこともよく知っておくと諭された。

この交響楽団は、先人たちの努力と真摯な聴衆の支持によって、今日の世界的名声を得ているが、一方では西洋音楽の構築性主要 4 項目や装飾的主要 4 項目を熟知せずに「リズムとメロディーだけを知っているだけの聴衆、指揮者の華麗な指揮ぶりを見にくるお客、指揮者の風貌・風聞うわさに攀つられてくる人々」も多く、また、一部の資産家や名士の虚栄の道具にされることも、ないとは言えない。

しかし、これらの人々も、やがては本物の聴衆になることがあるので、我々は右顧左眄うごさへん ひたすらせず、ただ只管、名演奏に向って邁進しているのだ。要は「指揮者の能力や聴衆の質を云々」することなく「演奏をするのは指揮者ではなく、大部分、我々だ！ この誇りをしっかり持って、日々励め！」と。

一方で、別のヨーロッパの某一流交響楽団の常任指揮者は、風貌も指揮ぶりも地味。しかし、この指揮者の演奏を信奉する世界中の西洋音楽通から彼は常に圧倒的な称賛を受けていた。来日する際、日本側の主催者は、抽選でチケットを捌くが、応募の葉書は他の来日指揮者の十倍を超え、主催者は日本の聴衆の音楽的審美眼の高さに驚嘆し、感動していた。

この楽団のメンバーも老若男女を問わず異口同音に「この指揮者は先ずメンバーに対して、仕上がりの 80%までは、堅牢な【構築性主要 4 項目】(リズム、メロディー、ハーモニー、楽式論)のみで、骨格造りをするを命じる」という。

そのあとで、要所要所のみ「奇てらを銜はわない正統派的解釈と骨太の曲づくり」を指示していく。この時彼は、可能な限り、好々爺風てらの笑顔でメンバーに近付き、要点を言葉少なに伝えていく。こんな彼にメンバーは、全幅の信頼感を抱く。



## V 指揮者の心得

- ◆ 本番直前のステージ練習の際、指揮者はまたは副指揮者のどちらかが客席の中央に座り、メンバーの演奏する音楽が、ステージの上だけで鳴っているのか、客席の中央辺りまで聞こえてくるのか、あるいはホール全体に素晴らしい音が響き渡っているのかを聴き分ける。一流交響楽団の演奏会に行くと、最初から卓絶したアンサンブルによる名演奏がホール全体に充満し、どの場所で聴いても感動することが多い。
- ◆ ワン・テージ終わる度の聴衆の拍手や、ブラボーの叫びが、真の名演奏に対するものか、お愛想的なものかを冷静に聴き分ける。歌舞伎の名優たちは大向こうから掛る「成田屋！ 音羽屋！」など称賛の掛け声の真偽を冷静に聴き分けている。
- ◆ 一級建築士（作曲家や編曲者）が、水準以下の仕事をして、棟梁（指揮者）が卓絶していると、水準以上の結果を得ることがある。逆に、一級建築士（作曲家や編曲者）が、水準以上の仕事をして、棟梁（指揮者）が不勉強だったり検討不足だったりすると、水準以下の結果しか得られないことになる。
- ◆ 選曲の際、指揮者にとって大事なことは、作曲家や編曲者の名声に捉われず、今取り上げようとしている作品が、真の名作であるかどうか識別することだ。  
 詩人やその著作権承継者の許可を得ないで、詩の一部を削除したり改変した後に作曲された歌曲や合唱曲の場合は、著作権法第20条（同一性保持）に抵触し、場合によっては、当該作品の演奏が出来なくなる場合がある。  
 原曲の趣旨や品位を毀損するような編曲作品、または甚だしく毀損しないまでも、原曲の趣旨や品位を汚すような曲想や転調などによる編曲作品の場合も同様である。
  - ・ 外国の著名な作曲家による原曲「永年、真摯に働いてくれた奴隷に対する、心からの哀悼歌」を、フォルティッシモを多用して編曲した作品や、伝統ある日本民謡に、異国ばやりの擬音を多用して編曲された作品は、各地で鬻ぎを買った。
  - ・ 編曲の模範作品といえばラヴェル編曲の「展覧会の絵」。ムソルグスキーの作曲による同名のピアノ組曲は、ラヴェルの編曲による管弦楽組曲として世界中に広まり、現代でも、繰り返し演奏されている。
  - ・ 山形県民謡の「最上川舟歌」の素朴さと力強さに感動した作曲家清水脩は、原曲の素晴らしさを、ア・カペラ男声合唱の技法を駆使して名作品に仕立てた。この曲は、我が国の男声合唱愛好家の琴線に触れ、多くの男声合唱団による力演は、常に、聴衆に強い感動を与え続けている。
- ◆ 演奏会は、幕開けからアンコール終了までが聴衆に捧げるプログラムと考え、アンコールの曲も、内容・演奏順序に起承転結を考慮すること。指揮者の好みということだけで選曲することによって聴衆を退屈させ、折角の本番の成果を台無しにしている事例が良くあるので、要注意。